



阪大

NEWS LETTER

44
No. 2009
Summer

●総長カフェ 21世紀懐徳堂ライブ
フローラン・ダバディー／鷺田清——1

相手の話を聴くことが 対話の始まり

●インタビュー——辻 毅一郎——5
「FrontierLab@OsakaU」が始動
留学プログラム・支援体制が充実

●社会学連携——金水 敏——7
市民目線で大学が変わる
多様な「社会学連携」を展開、大阪に花開くカフェ文化

OB訪問——松澤佑次・住友病院院長・大阪大学名誉教授——9

元気です！在学生——瀧下雄大・工学部4年生——10

健康——海外渡航と健康上の注意——太田妙子——11

文学・芸術の今を語る——夢のかたちとフキダシ（風船）の文化史——荒木 浩——12

研究室紹介——生体内分子を可視化する——菊地和也——13

阪大ニュース——14



OSAKA UNIVERSITY
FACULTY OF HUMAN SCIENCES



日仏の教育から、哲学、ファッションまで

○スポーツキャスター、FMラジオ番組制作者兼ナビゲーター
フローラン・ダバディー Florent Dabadie

○大阪大学総長
鷲田清一 Kiyokazu Wajida

相手の話を聴くことが 対話の始まり

1998年から2002年までサッカー日本代表トルシエ監督の通訳を務め、現在はスポーツキャスターとして活躍中のフローラン・ダバディーさん。大きなジェスチャーを交えて怒鳴っていた姿を覚えている読者も多いだろう。しかし、この日、鷲田総長の前に現れたのは、ことばと文化を愛する静かな青年だった。フランスの教育事情から、哲学、ファッションまで息のあった二人の「対話」をお届けする。



私は最近、
ネイティブ発音なんて、
どうでもいいと思うように
なりました。

(ダバディー)

鷲田 ダバディーさんとは1年前、FMラジオの番組にお招きいただいて以来のおつきあいですね。

ダバディー あの時、本当に勉強になりました。先生と撮った写真は、今も番組のホームページに残っています。

鷲田 この間も、杉本さん(杉本博司、写真家の展覧会で一緒にいた時、大阪の国立国際美術館まで東京から見に来られましたね。一般の方にとって、ダバディーさんは2002年のサッカーワールドカップの時の通訳としてのイメージが強いのでしょうか、一方では映画、アートなど、現代の都市文化を幅広く見ておられます。

また、フランスのご出身で、アメリカや日本の大学でも学ばれた経験がありなので、今日は教育や文化をめぐって、いろんな話を伺いたいと楽しみにしています。

フランスの高校には「哲学」の授業がある

鷲田 フランスの高等学校では、週に8時間も哲学の授業があると聞きます。いつとき授業数が減ったんだけど、ジャック・デリダ(哲学者)らが猛烈な抗議をして、元に戻ったとか。日本では哲学っていうと、理屈の好きな人が集まってむづかしい議論をしている、役に立たないと言われがちなんです。フランスでは高校の教育から哲学が視野に入っているところが違いますね。ダバディー 確かに、哲学は高校の科目になっていました。フランスでは哲

学を学校で教えるのがひとつの理想なものでしょうね。でも、授業が始まるのは3年生からなので、実際には受験勉強になってしまふんですよ。私も自分が何を勉強したのか、よく覚えていません。日本には哲学の授業はないんですか？

鷲田 全くありません。倫理という科

クリティカルであるとは、何が正しくて、何が正しくないのか、何が大切なのかを見分ける、あるいは見極めることです。(鷲田)

目がありますが、あれは主として思想史ですね。しかも、日本には専門の先生があまりいなくて、歴史の先生が倫理も教えていることが多いんです。ダバディー フランス人はディベート好きだから、哲学に向いているのかも知れません。ただ、しゃべっている時に相手の話を聞いているか、というと、

そうではありません。高校生も自分の意見は言うけれども、対話になっていない。哲学の授業でも、むしろそういうことを教えるべきだと思うのですが……。

対話、クリティカル・シンキング、臨床哲学

鷲田 ディベートと対話の違い、という話題が出てきました。もっとも簡単に言ってしまうと、ディベートは「話し合いの結果、勝つ」ことが目的であるのに対して、対話の場合は「話し合ったあとで考え方、感じ方が変わっていないと意味がない」ということです。

ダバディー それは、クリティカル・シンキング(批判的思考)ということでもありますね。私のラジオ番組でインタビュしましたミッテラン大統領の時代の文部大臣ジャン・ピエール・シェヴエナマン氏が「教育で身につけるべきことは、いい意味でのクリティカル・シンキングだ」と言いましたが、それに関して、スタンレー・フィッシュという文芸評論家がおもしろいことを書いていました。クリティカルというのは相手をやっつけることではなくて、相手の考え方を分析して、違う視点を提供することだと、鷲田先生と同じことを言っていますね。

鷲田 クリティカルであるとは、何が正しくて、何が正しくないのか、何が大切なのかを見分ける、あるいは見極めることです。日本語では、批判的と

●鷺田清一(わしだ きよかず)
1949年京都府生まれ、大阪大学文学部教授、大学院文学研究科長、理事・副学長を経て、2007年8月に大阪大学総長就任。専門は臨床哲学、倫理学。

話

いうと、何か人の考えを攻撃して言い負かすという語感がありますが、クリティカルということばの語源は「分ける」ということです。

ダバディー フィッシュが書いていることは、1年前、鷺田先生が私の番組で話してくださった「臨床哲学」にも通じると思います。先生は、町に出て人々の話を聞き、そしてそれを構造化して、自分の考え方を組み立てる。そういうことが臨床哲学だと言っておられました。その時、どれぐらい「耳」をもっているかが大事だというお話が、とても印象に残っています。私自身、日々仕事をしていく中で、デイベートではなく対話が大事だということを痛感していますから。



自分の考えをことばで組み立てるのが哲学

鷺田 ところで、ダバディーさんは早くから第2、第3外国語を習得しておられるけれど、私は外国語がどうも苦手なんです。日仏会館でフランス語を習っていた時も、先生に「カタストロフ(破滅)！」と言われてしまっただけ。一般のフランス人はどうなんですか？ダバディー 私が勉強していた15年前には、フランスの学校では先生もフランス式発音で教えるし、街でも英語に触れる機会はほとんどなかったですね。大半のフランス人の英語は、日本人と変わらないと思います。私は、小学生の時からアメリカのサマーキャンプに

通って会話ができるようになりましたが、大半のフランス人はまだ外国語に苦労していると思います。

鷺田 それじゃあ、フランス人も私たちと同じで、ダバディーさんのように英語が自由に使える人が羨ましいでしょうね。

ダバディー でも、私は最近、ネイティブ発音なんて、どうでもいいと思うようになりまして。昔の私は、英米人と同じノリで話そうと必死だったけど、言いたいことをちゃんと伝えていたかという、全然そうではなかった。一方、外国で勉強しなくても、一生懸命努力して、美しい英語で自分の考えを表現できるようになった人もいます。

私はそういう人を尊敬するし、私自身も、自分の想いを日本語で組み立てていけるようになりたいと思っています。鷺田 外国語で「想い」を表現する作業も、哲学の一つですね。専門分野としての哲学でない、広い意味での哲学は、自分の考えをどう組み立てるかということです。

ダバディー 子どものころは「父がクリエイターだから、自分の世界もクリエイティブなんだ」と信じていました。

でも今は、人は遺伝子ではなく、その人の努力と環境によって決まるのだとやっと思ふようになりました。

鷺田 「私」は、時間を通じて、つまり誰と出会ってきたか、誰にとつての自分であつたか、ということが変わっていきますね。また、日本語に、僕、俺、あたし、など一人称を指すことばが数多くあることから分かるように、場面によっても変わるものだと思います。

今の子どもたちは、閉ざされた環境で育つ

鷺田 最近、教育というのは、本当は「教える育てる」という他動詞ではなく、「育てる」という自動詞で考えるべきではないかと思っているんですよ。つまり、「こういう場所にいれば勝手に育つ」という環境を用意するのが教育じゃないかと。

ダバディー 子どもは周囲の影響を受けて育っていきますからね。

鷺田 日本では、子どもが育っていく環境が劇的に変わってきています。昔は家も地べたにあつて、鍵もなかった。けれど、今ではほとんどの子どもが郊外の集合住宅で育っているんです。育

●フローラン・ダバディー (Florent Dabadie)
1974年フランス、パリ生まれ。サン・ルイ・ドゴンザック校で小・中・高一貫教育を受けた後、米国UCLAに短期留学。その後、パリ東洋語学院日本語学科に入学。在学中、静岡大学に留学。1997年卒業。1998年、映画雑誌「プレミア」日本語版創刊に際し、編集者として来日。同年より2002年ワールドカップ終了時まで、サッカー日本代表監督トルシエ氏の通訳を務める。現在、TVスポーツキャスター、FMラジオ番組のナビゲーター兼制作、雑誌コラムニスト等として活躍中。

対

つ環境が、鉄の扉に閉ざされた、限られた空間になっている。これは日本だけで起きていることでしょうか？

ダバディー どうでしょう。私はもう日本に長くいるから、今の状況をはっきりとは答えられないけれど、フランスやアメリカでもあまり変わらないと思いますよ。

驚田 親元を離れた大学生もマンションで一人暮らしですから、地域の一人であるという感覚はなかなか持てない。昔の大学生は下宿で生活していました。ダバディーさんにはイメージが湧かないでしょうけど、ふつうのお家の一部屋を間借りして、ご飯も食べさせてもらうんですよ。

ボランティアも、相手の声を聞くことから

ダバディー 実は私、仕事を通じての社会貢献は大事だと思いますが、無償ボランティアには抵抗があるんです。それでは仕事に責任が持てないんじゃないでしょうか。

驚田 私は、ボランティアには肯定的な気持ちをもっています。今の若い人たちは大概「自分がここにいてもいいの」と悩んでいます。それが、ボランティアをきっかけに「自分が人のために何ができるか」と発想を反転させることができ、自分の存在が開ける。それは大変いいことだと思っているの



ダバディー ああ、そういうプライバシーの無い親密さは、私には無理ですね。こういうところはヨーロッパ人なんでしょうね。

驚田 いや、今は日本人だって誰もそんなことはしたくないですね笑。「銭湯の文化は良かったか」という問題と同じで、人間関係が近すぎてイヤだという人は大勢いますよ。

ダバディー でも、自分の力を見極めないで人を助けようとする、かえって現場に迷惑をかけるではありませんか。

驚田 確かに、ボランティアは一過性の活動になりがちなので、継続的にどう責任をもつてかわっていくのか、という問題はありますね。ただ、現場

の側にもある程度は受け入れる寛容さが必要ではないでしょうか。オバマ大統領が就任演説の時、「new way of responsibility(新しい責任の時代)」というフレーズを使いましたが、responsibility(責任)とは少し違います。という「責任」とは少し違います。respond(応える)という動詞からきていて、相手に応える力、という意味合いをもっているのです。ボランティアの概念は日本語の「責任」とはあまり合わないけれど、respondとは合うような気がします。

ダバディー 相手の声に応えよう、というボランティアなら、あんまり肩肘を張らずにできそうですね。

驚田 また、責任をもつことは大事ですが、一方で、人間は「間違いの存在」。許し合わないといけない。お話を聞いて、そんな感想ももちました。

他人の視線をデコレートするのがファッション

驚田 最後にになりましたが、ダバディーさんの服装に対する考え方を伺いましょう。私はファッションについての本を何冊か書いたこともあって、服装には関心があるんですよ。近ごろの日本では、小中学校の先生はジャージ姿が普通なのですが、フランスではその辺りはどうなのでしょう。私には、昔のヨーロッパ映画に出てくる先生はきちんと三つ揃えを着ていた、という記憶があるんですが、私

が子どものころは、先生はちゃんと服装をしていましたね。その影響からか、私自身も、きちんとしておきたい、ルーズな服を着るとルーズになる、と思っています。堅苦しくする必要はないけれど、ネクタイを締めるかどうかとか、ほんのちよつとのことによって印象が変わるんじゃないでしょうか。驚田先生のことに「ファッションは他人の視線をデコレートすることだ」というのがありますね。私はあのことばが好きです。ファッションは一種の自己主張でもあります。見ている人を喜ばせるものだという驚田先生のことばを考えると、そこにも「ちゃんとする」責任を感じます。

驚田 ただ、「他人の視線をデコレートする」のは、美しさだけではないんですよ。「あつ」と思わせるようなデコレーションの仕方もあります。そこから会話が始まるなら、それもまたよし、だと思つたのです。

ダバディー かつて、サッカー日本代表の通訳としてスタジアムに入っていた時には、「スーツで守られている私」がいました。存在感をアピールするために、格好をつけていたのですが、逆にそれは、ことばに対する自信のなさをカバーすることでもあったのです。もし、もう一度同じ仕事を頼まれたら、あんなに大袈裟にはしませんよ。今は、日本語にも少し自信がありますから。驚田 今日はあつという間に時間が過ぎましたね。また、大阪でお会いしましょう。

「FrontierLab@OsakaU」が始動

留学プログラム・支援体制が充実 世界のトップクラスの大学に——



◆全学的に国際交流に取り組む

——まず、大阪大学の国際交流を推進する体制について。

国際交流に関しては「国際交流推進本部」が設置され、全学的な視点から促進してきましたが、2008年4月から「国際交流室」となりました。文部科学省の「大学国際戦略本部強化事業」からの支援で開設された「国際企画室」も、同時に組織改編により「国際企画推進本部」となり、国際交流室の施策立案のためのシンクタンクとしてさまざまな調査・企画を行っています。国際企画推進本部のメンバーには若い人もおり、特定のテーマについてフリーディスカッションを繰り返し、そこで企画を練って国際交流室の方に



○ 大阪大学理事・副学長
辻 毅一郎——Kiichiro Tsuji
E-mail: tsuji@hq.osaka-u.ac.jp

外国人に魅力のある大学は、日本人にとっても魅力のある大学だ。
「世界のトップクラスの大学になるには、国際化が前提条件。高い教育・研究水準を保っていくためには、世界に向かって開かれた大学でなければならず、外国人を積極的に受け入れないと取り残されていく」と、辻毅一郎・国際交流室長は語る。

上げていくようにしています。

一方、従来の「国際交流委員会」は、主要な研究科・センター等部局を代表する委員で構成される全学委員会であり、国際交流室は基本的に同委員会の意見を尊重しながら、調査・研究を進め、各種施策を実施しています。

◆留学生受け入れの新コンセプト

——国際交流室が力を入れている具体例を挙げてください。

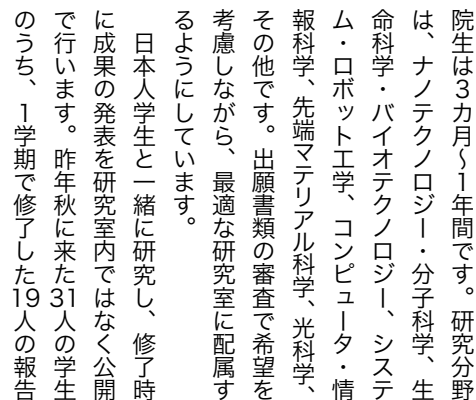
これまでに短期留学派遣・受け入れ促進や、海外研究者・留学生のための支援サービス機能を強化するための施策を立案してきました。欧州委員会における学生交流プログラムや世界大学ランキングに関する調査など、多くの調査・研究も実施してきました。

最近のトピックスとしては、理工系の短期留学生受け入れプログラム「FrontierLab@OsakaU」(フロンティア・ラボ)を立ち上げて、昨年の秋から学生を受け入れ始めています。本学の優れた理工系教育の特長を海外の大学と学生に伝えるため、国際企画推進本部が中心となり、受け入れる研究室と教員の負担を減らしつつ、研究と実験が主体のプログラムづくりを進めました。

研究室単位で少人数の学生を受け入れる形で、当初は工学、基礎工学、理学の3研究科でしたが、さらに医学系研究科、情報科学研究科、生命機能研究科、微生物病研究所、核物理研究センター、産業科学研究所、蛋白質研究所などに受け入れ先が広がっています。

対象者は3年以上の学部生と大学院生で、学部生は1〜2学期間、大学





留学生および受け入れ側のメリットは？

一方、先生方は英語で講義をするとなると大変ですが、実験や研究の指導なら比較的負担が軽くて済みます。また日本人学生には、留学生と英語で話したり共に実験したりすることがよい刺激になり、海外留学へのモチベーションを高めるなど、異文化交流の効果も期待できます。

◆世界大学ランキング44位

挙げればきりがありませんが、例えば、EU政府と日本学生支援機構が共同で開始した学生相互派遣プログラム――EUCa (Industrialized Countries Instrument Education Cooperation Program)では、欧州4大学(日本は本学と京都大学、東北大学)が加わるコンソーシアムを組むにあたり、グロニンゲン大学が中心になって提案段階から協力してくれました。

の国際戦略の大きな柱になっています。

世界の優秀な研究者や学生が集まる大学にするためには、知名度を高めることが必要です。タイムズ世界大学ランキングを見ると、大阪大学はここ3年、70位、46位、44位と上がってきています。この評価基準は、研究者による評価(ピアレビュー)が最も大きな部分を占めており、対学生教員比率、教員数に対する被引用論文数比率などの得点に加えて、ピアレビューによる評価の向上が本学の順位上昇に大きく寄与しています。これは、海外拠点でのいろいろな活動も評価された結果だと考えられます。

◆外国人に魅力のある大学に

— 宿舎などのサポート体制は？

ビゼの申請や宿舎の斡旋などは従来受け入れる先生方が世話をしてきたのですが、「サポートオフィス」を設けて一括して対応するようになり、サビス体制が改善されました。宿舎については、本学と連携協力協定を結んで

いる国際協力機構（JICA）の大阪国際センターの宿舎を特別料金で提供していただきます。

— からの課題は？

「留学生30万人計画」とともに、留学生比率を2020年には20%以上にするという施策案が打ち出されています。本学では長期滞在型のプログラムとして、英語の授業だけで博士の学位取得が可能なコースを、生物工学、量子工学、船舶海洋工学、基礎工学の4分野で設置しています。

これらの英語コースをベースに、国際交流室では「インターナショナル・カレッジ」を検討しています。文系も含めて、外国人に魅力のある教育プログラムを提供するシステムができれば、それを日本人学生にも開放することにより、相互の国際化に貢献できると思います。



市民目線で大学が変わる

多様な「社学連携」を展開、大阪に花開くカフェ文化



○ 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長
大阪大学21世紀懐徳堂運営委員会副委員長
大学院文学研究科 教授
金水 敏 — Satoshi Kinsui
E-mail: kinsui@let.osaka-u.ac.jp



社学連携活動を通じたインターンシップの推進



「ラボカフェ」はご存じ？ 2008年10月に開通した京阪電車中之島線のなにわ橋駅内の「アートエリアB」で行われている、市民参加型のカフェ活動だ。カフェという環境装置をラボラトリ（実験室的）に用いて、哲学、アート、サイエンスなど多岐にわたるテーマで、対話、レクチャー、アートイベント

大阪大学は他大学に先駆けて「社学連携」を掲げ、社会貢献事業に取り組んできた。学内で社学連携の実験的・先導的なモデルづくりを行ってきた大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)の活動に加えて、大阪大学21世紀懐徳堂の役割もしだいに明確になってきている。

大阪大学21世紀懐徳堂ホームページ
<http://21c-kaikokudo.osaka-u.ac.jp/>

金水敏教授(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長・大阪大学21世紀懐徳堂運営委員会副委員長)は、「現在では実験的に始まったところで、CSCDが中心となってコンテンツを作っていますが、今年度からは本格的に大阪大学21世紀懐徳堂を窓口として各部署からコンテンツを募集し、駅で実施して意義のあるものを展開していく予定です」と、全学的な取り組みで

ラボカフェを主催しているのは、大阪大学とNPO法人ダンスボックス、京阪電気鉄道の合同チームである「中之島コミュニケーションカフェ」プロジェクトチーム。大阪大学21世紀懐徳堂の共催。大学の知、アートの力、地域の活力を結集して都市空間としての駅の可能性を実験するプロジェクトであり、中之島エリアの文化・芸術の創造と交流の場となることを目指している。



大阪大学の社学連携活動を網羅し、知的資源に関する情報を発信する21世紀懐徳堂のホームページが開設され、キャンパス内に設けられたコミュニケーションギャラリーと多目的スタジオオも稼働している。市民と大学とを結びつけるコーディネート事業が、新たな段階を迎えている。

座(旧称「開放講座」)、朝日カルチャーセンターとの共同事業である「Tanda Asia 中之島塾」をはじめ、各部署単位での大小の公開講座、講演会、公開イベント、レクチャーコン

ラボカフェを主催しているのは、大阪大学とNPO法人ダンスボックス、京阪電気鉄道の合同チームである「中之島コミュニケーションカフェ」プロジェクトチーム。大阪大学21世紀懐徳堂の共催。大学の知、アートの力、地域の活力を結集して都市空間としての駅の可能性を実験するプロジェクトであり、中之島エリアの文化・芸術の創造と交流の場となることを目指している。

あることを強調する。CSCDは大学院学生の共通教育を担当するとともに、社学連携の先導的な役割を担っている。その一つが「サイエンスショップ」である。地域の市民や市民グループ、NPO、NGO、学校や自治体などの「利用者」からの相談・依頼をもとに、学生が主体となって教員の助言・指導を受けながら、相談に対する回答や研究・調査を行い、利用者の問題解決や社会活動をサポートする。CSCDの活動以外にも、大阪大学はさまざまな社学連携事業を展開している。総合学術博物館もその一つであり、また伝統ある社会人講座「中之島講

社会的使命を果たし、研究を触発する

——「社会学連携」という言葉は、大阪大学が使い始めたのですか。

産学連携はこの大学でも推進していますが、ある意味で大阪大学のお家芸といえます。それと並んで社会学連携という新しい言葉を用いて社会貢献活動に取り組みようになったのは、市民一人ひとりと大学が直接つながる活動を足元から見直してみよう、市民目線に立つことによって大学の在り方を変えていこうということだと受け止めています。

2005年の中央教育審議会答申で大学の社会貢献の重要性が強調され、その翌年に改定された教育基本法でも、大学の社会貢献がミッションとして

はつきりうたわれています。現に、社会性を無視した研究の暴走や論文の捏造なども起こっており、大学人が市民目線を忘れた時にそういうことが起きてしまいます。

そもそも本学が帝国大学として大阪に創設されたのは市民からの要望によるものであり、さかのぼれば懷徳堂と適塾という私塾が精神的基盤になっています。これからの「知識基盤社会」では、大学の持っている知的財産を市民に提供していくのに、いろいろな形があつてしかるべきです。CSCDが中心になって実験的な試みや先導的なモデルづくりをしてきましたが、それを大学全体に及ぼしていこうと考えているところです。

——21世紀懷徳堂の役割は？

大阪大学は従来、社会学連携活動に該当することをたくさん行ってきました。にもかかわらず、外から見るとそういうことをしている大学に見えない。大阪大学21世紀懷徳堂は、社会学連携活動の情報を全部集めて分かりやすく示し、市民の皆さんに開かれた大学であるという面をアピールしていく重要な役割を担っています。

大阪大学といっても印象がばらばらで、全体としてどんな大学であるのかが見えない。部局ごとの独立性が強い

のも原因の一つで、ユニバーシティ・アイデンティティを形成していくことが必要です。まずは市民目線から見た大学のあり方を、大阪大学21世紀懷徳堂としてまとめて提示していきたいと思っています。

——学生にとって社会学連携のメリットは？

例えば昨年からは、社会学連携活動を通じて学内インターンシップを行う試みを、CSCD科目の一つ「地域コミュニケーションデザイン・コーディネーター



入門」という授業で始めました。学生が社会学連携活動にかかわることにより、それぞれ専門家として市民とコミュニケーションするなかで、学生の立場や大学を多角的に見る機会が得られます。自分がどういう立場の人間なのか、社会からどう見られているのか、大学とは何なんだろうと考えることで、大学の見え方が随分違ったものになるでしょう。

地元の石橋商店街の方と共同で実施

した「まちかねておはこ祭」では、市民の皆さんが学内で教員や学生と交流できたことを非常に喜んでくださいました。去年の受講生と今年の受講生との交流もあり、そのなかで地元の方との交流も継続していけたらと思います。

——社会学連携は、教員や研究者にとって

は？
教員全員が市民相手に何かしなければいけないとか、大学の在り方を根本的に変えようというのではないのです。社会学連携活動に参加すれば、それによって得られる喜びはあるでしょうし、直接参加できなくても、大阪大学は市民の大学なんだという意識を持っていたらいい、自分の研究・教育も最終的には市民に還元されるべきものとして運営していくことが、大学の社会的使命だと思ふのです。

社会学連携事業に参加された先生方の多くが、非常に面白かった、むしろ自分が啓発された、一般市民の方の声を直接聞くことができた、あるいは市民の方にかみ砕いて話をしてレスポンスをじかに受け取れたとおっしゃいます。科学者とアーティストによるトークイベント「知デリ」（知術研究プロジェクト）では、アートと自分たちの研究は近いところがある、アートが研究を触発する部分があるということ、何人もの方が感動をもって語られるのを聞いています。そういう出会いを演出し、研究者にとっても視点を変えるきっかけになるような、新しいタイプの社会学連携を考えていきたいですね。

◀豊中キャンパスの地元、石橋商店街の皆さんと
大阪大学の学生、教職員が交流を深めた「まちかねておはこ祭」



●松澤佑次(まつざわ ゆうじ)氏

1941年和歌山県生まれ。66年大阪大学医学部卒業。第二内科学教室入局。米国カリフォルニア大学サンディエゴ校留学。母校教授を経て2000年同附属病院長、03年より現職。病院のある大阪・中之島を散歩道や自転車道の整備された「健康アイランド」に、と提案している。カラオケの十八番は河島英五。

和歌山県立田辺高校を卒業した60年に医学部入学。医師になる強い志があったわけではない、という。「僕は文科系でもなく、かといって理科系が得意というわけでもなかった。人間が好きだからというレベルの動機で選んだのが医学部。あえて言うなら、家族が診てもらっていた地元の紀南病院に阪大出身の先生がたくさんおられたことに、阪大医学部との接点があったかもしれない」

60年安保闘争で社会は騒然とし、学生運動真っ盛りだった。「田辺から一人で出て来て、最初は勉強でもしなやかなのかと思っていたものの、大学はロックアウトされ授業はない。僕はノンポリですけど、皆について梅田から御堂筋を南に歩くデモ行進に参加した。淀屋橋あたりでジグザグ行進して、難波で解散したら、高島屋の屋上ビアガーデンでビールを飲み、同級生だった開業医の息子の家に行つてマージャン。そんな毎日で、ええんかなと不安を感じながらも一体感があつた。当時の仲間は同志ですね。卒業まで遊びも勉強も助け合つて過ごした。いちばん大きな財産だし、この時代がその後の人生の精神的な支えになっています」

専門に進むころには世の中も静まり、勉強に忙しい日々が始まる。内科を選んだ。自主的な研修を行うなどして抗議。こうした動きの後に68年、制度は廃止された。

「今の学生は、横のつながりがないせいなのか、おとなしい。一人ひとりは強くないけれど、まとまれば力になれるという時代をすごしてきた僕からすると、もうちょっと元気を出して」



○OB訪問
住友病院長・大阪大学名誉教授——松澤佑次——Yuji Matsuzawa

「阪大時代の経験と仲間が精神的支柱です」 メタボリックシンドロームの概念を確立

大阪・中之島の住友病院長を務める松澤佑次さん。2005年、日本肥満学会など八つの学会を率い、内臓脂肪型肥満とメタボリックシンドロームの関係をいち早く明らかにして予防と治療の方法を提唱した。国の特定健診制度(08年より)にもつながり、「メタボ」はいまや広く知られる言葉にもなっている。阪大で青春時代を過ごしたのは60年安保闘争の真っ最中。「その時代の経験と仲間が今を支える大きな財産」と語る。

ぶ際に大きく影響を受けたのは西川光夫、山村雄一両教授(いずれも当時)だという。「西川先生からは、患者さんをきめ細かに診ることのすばらしさを学び、山村先生は、生化学を勉強して病気を説明するという一つの方向性を示してくださった。夏休みに実習で行った実家近くの紀南病院の、やはり阪大出身の中村正作先生も、地域医療に専心しておられる姿が印象的でした」

卒業した66年は、全国の医学部生の間でインターン制度廃止運動が盛り上がりを見せた年。当時は卒業後、医師免許取得の前に1年間の臨床実地研修が義務付けられ、医師でも学生でもない不安定な身分で診療を強いられるとして、制度の廃止が叫ばれた。松澤さんはインターン制度による実地研修と、翌春の医師国家試験をボイコット

「僕は家に帰ったら食事の前に30分、自転車をごぎます。ライフスタイルに運動を取り入れ、習慣化することをお勧めします」



水泳は「いかに自分を知るか」だ

ジャパンオープン2008 50㍍平泳ぎ4位(学生1位)

○工学部 4年生

瀧下雄大——Yudai Takishita

大阪大学体育会水泳部はこの夏、七帝戦3連覇に挑む。

大阪大学の水泳の力を全国に知らしめたのが、主将の瀧下雄大さん。

昨年度の個人成績は素晴らしく、ジャパンオープンで

50㍍平泳ぎ4位(学生では1位)をはじめ実力は全日本のトップレベルだ。

その強さの秘けつに迫る。

小学生時代からジュニアオリンピックに出場し、福岡県では敵なしという実力の持ち主だった。

いつ水泳を始めたかは覚えていない。物心がついたときには、地元のスイミングスクールで泳いでいた。中学生時代には、目標にしていたタイムをクリアして日本選手権に出場。高校まではひたすら個人記録をアップさせることを目指して練習してきた。だが、大阪大学に入学して水泳観が変わったという。

「水泳は個人競技であるとともに団体競技の面があるのです。一人ではなく、皆と競い合って練習していくなかで自分のタイムが伸び、目に見えて成長していることを確認できる。その結果が集約されてチームの勝利に結びつく。そういうところが面白いと感じています。これは大学水泳をしていなかったら、分からなかったと思います」

水泳部は数ある阪大運動部の中でも部員数が最も多く、1000人を超えている。瀧下さんのように日本のトップレベルのアスリートから、50㍍を泳げるようになったばかりの初心者まで、個人差が大きい。普段は泳力別に練習をしている。月曜日から金曜日までの朝練は自由参加で、午前6時半から2時間。土曜日の練習は全員参加。私立大学の学生に比べると練習時間が少ないので、「集中力を高めるようにしている」という。

現在、阪大水泳部は全国七大学総合体育大会(七帝戦)で2連覇中。瀧下さ



●瀧下雄大(たきした ゆうだい)
1986年福岡県生まれ。久留米大学附設高等学校卒業。工学部環境エネルギー工学科4年生。大阪大学体育会水泳部に所属。2008年2月、競泳ジャパンオープン2008で50㍍平泳ぎ4位(学生では1位)、2008年8月、全国国公立選手権水泳競技大会100㍍平泳ぎ2位、50㍍自由形3位。

んは主将として、練習だけでなく私生活でも後輩と一緒に食事に行くなど、コミュニケーションを大事にしてきた。個人記録も昨年は目覚ましく、ジャパンオープンで50㍍平泳ぎ4位(学生では1位)、全国国公立選手権100㍍平泳ぎ2位、50㍍自由形3位と、実力ぶりを発揮した。

「ある程度のところまでは練習したい。それ以上は『いかに自分を知るか』だと思います。北島康介選手の泳ぎを僕ができたからといって、速くなるとはかぎりません。それは彼と同じ体つきではないし、筋力も体の柔らかさも違うから。自分に合った泳ぎを見つけていかなければいけないのです」

人それぞれの泳ぎ方があり、自分なりのフォームがあるという。瀧下さんは水中ビデオで泳ぎをチェックし、試合のVTRを見て研究してきた。そして、試合になれば自然体で臨む。自分の長所について、「根拠のない自信を持っているところ」と表現した。

「練習しているから根拠があると言えはあるのですが、試合前になったらポジティブになり、ものすごい自信に満ちあふれてきます。緊張してガチガチになる人が多いなかで、僕は勝てる気がしてならない、そんな気分になるのです」

既に就職も決まっている。3連覇を懸けた7月の七帝戦が主将として最後の試合に、9月のインカレがアスリートとして最終試合になる。当日は自信がみなぎっていることだろう。

健康

「海外渡航と健康上の注意」

保健センター

教授

太田 妙子 Taeko Ohta

E-mail: ohtae@wellness.hss.osaka-u.ac.jp



観光・出張・海外赴任・調査・留学など目的はさまざまですが、渡航の機会は随分多くなりました。

島国ですから交通手段の98%は飛行機です。昇降時の機内気圧変化や長時

図1 旅行者血栓症(深部静脈血栓症)



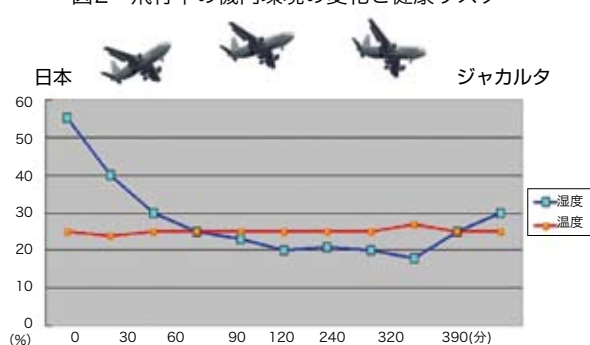
間座位などは身体に大きな影響を与えます。よくいわれるエコノミー症候群(旅行者血栓症、深部静脈血栓症)もそうです。図1のように膝より下にできた血栓が血流に乗り、肺などに詰まって生死に関わることもあります。これは飛行機だけでなく大災害後の避難所生活、手術後の長期臥床、乗り物や観劇など長時間同一姿勢でいれば同じように危険です。また航空機内圧は0.8気圧で地上より少し低く、図2のように湿度は20%ぐらいで砂漠並みの乾燥です。便秘は禁物、腸内ガスが膨張して苦しくなります。コンタクトレンズよりも眼鏡が安全、脱水に注意して小マメに水分をとりましょう。

さて渡航先の情報収集は大切です。交通ルールの違いから、治安、先進国か途上国か、流行している病気などなどです。チューリッヒ大学のステファン教授によると途上国に1カ月以上滞在した場合、なんと3分の1の人は「旅行者下痢症」にかかるそうです。

原因は腸感染症だけでなく水の性質、食物や香辛料の影響もあります。感染症対策は大切ですが「熱帯医学」は日本で戦後しばらく顧みられなくなりました。理由は植民地政策を思い起こさせる「禁断の医学」として避けられてきた側面もありましょう。しかし企業の海外発展、国際交流、温暖化など研究面でも国の内外一元化、グ

間座位などは身体に大きな影響を与えます。よくいわれるエコノミー症候群(旅行者血栓症、深部静脈血栓症)もそうです。図1のように膝より下にできた血栓が血流に乗り、肺などに詰まって生死に関わることもあります。これは飛行機だけでなく大災害後の避難所生活、手術後の長期臥床、乗り物や観劇など長時間同一姿勢でいれば同じように危険です。また航空機内圧は0.8気圧で地上より少し低く、図2のように湿度は20%ぐらいで砂漠並みの乾燥です。便秘は禁物、腸内ガスが膨張して苦しくなります。コンタクトレンズよりも眼鏡が安全、脱水に注意して小マメに水分をとりましょう。

図2 飛行中の機内環境の変化と健康リスク



ローバル化は避けられません。それにまた、新型インフルエンザのパンデミックなど何時非常事態が勃発するか危惧され警鐘が鳴らされています。

ワクチンの中でもA型・B型肝炎、破傷風は多くの医療機関で受けることができます。熱帯亜熱帯では蚊の媒介する重大な病気が多くあります。熱帯熱マラリア、デング熱、日本脳炎、ウエストナイル熱、黄熱病など命取りにもなります。近年日本でもマラリアの予防内服薬を手でできるようになりました。ただしトラベルクリニックなどを受診し自費で求めなくてはなりません。

- ① 渡航先の医療制度や医療機関情報を知ること
- ② 病気や注射使用者は必ず英文診断書、病歴、処方薬、治療などに関する英文説明書を携帯しておくこと(税関検査での不要な疑いを避ける、また現地での受診のために)
- ③ 酸素吸入(ボンベ)使用者、食物アレルギーのある人は早めに航空会社へ連絡しておくこと
- ④ 海外旅行傷害保険に入っておくこと

ん。黄熱病のワクチンは検疫所で受けます。破傷風ワクチンは現在では皆、子供の頃接種するはずですが。しかし成人になると抗体価は下がってしまします。10年に一度は追加するのが良いでしょう。また動物の咬傷にも注意、狂犬病は特に重大です。

以上、旅行に付随する特殊な病気を挙げました。しかし実は中高年で一番多いのは生活習慣病や持病の急性増悪です。海外滞在中死亡の第一原因は心血管系の突然発症です。

最後に海外渡航に際して守るべき注意を次に箇条書きにしました。

Letters & Arts

NOW

・文学・芸術の今を語る

「夢のかたちとフキダシ(風船)の文化史」

文学研究科教授

荒木 浩 Hiroshi Araki

E-mail: hiroark@let.osaka-u.ac.jp



ハーバード美術館に、「清盛斬首の夢」と仮題される『平家物語』絵巻がある(図1)。松平定信監修の下絵を貼り合わせた断片的なデッサン集である。巻頭から、夢の世界をフキダシのように描く印象的な絵が現れる。平清盛の長男重盛が床に横たわり、なぜか海辺にある春日大社の鳥居を夢に見る場面で、群衆のざわめきに目をやれば、父の首が剣の切っ先に突き立てられて振り回されている。重盛は間もなく病で父に先立ち、平家滅亡の運命も、この悪夢に暗示される。ハーバードの下絵集は、この場面を計3回もスケッチし、画家が構図を整えていくプロセスがよく分かる。ニューヨーク公立図書館蔵の定信監修の下絵は、このデッサン集をもとに整えたらしい清書前の下絵で分量も多く、豪華な絵巻物となっている。

日本では古代、夢は他者の心の侵入だった(相手が自分を想うから夢になる)、神仏のお告げの回路(わらしべ長者も)だった。『石山寺縁起』や『東

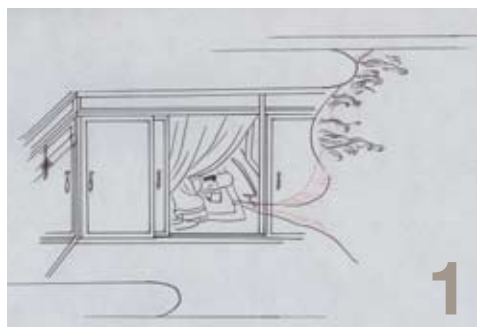
征伝絵巻』など古い絵巻では、夢の世界と現実とを区別せず、同じ画面の中に描く。だから夢を個人の脳裏に帰着する描線で括る、というのは、夢の近代化と個性の問題をも含み、興味深いことなの

だ。漫画のフキダシにもよく似ている。江戸時代の黄表紙という絵入り本の代表作『金々先生栄華夢』は、栗の煮える間に一生を夢見た中国の邯鄲の話を翻案して、男の夢をフキダシで括って物語の枠組みを作る。フキダシの中には文字が活写され、まるで漫画そのものなのだ(辻惟雄『奇想の江戸挿絵』参照)。

西洋にもあるフキダシの文化(四方田犬彦『漫画原論』参照)だが、唐土の邯鄲をもじることから、夢のフキダシは中国伝来だろう、と気付く。唐土の夢はフキダシ

の夢はフキダシ

の夢はフキダシ



1



2



3

図1 ハーバード絵巻の最終構図—夢のフキダシ
図2 頭のとっぺんから吹き出す夢(『南柯太守伝』挿絵)
図3 皇帝の死とフキダシ
(『全相平話』より「漢高祖升遐立恵帝」)

※挿絵はいずれも大学院生・高野はるか氏の模写による。

に相応しく、魂の遊離とも考えられたが、はたして中国には、14世紀以前に遡る資料も確認出来るようだ(高橋文治教授ご教示)。もっとも、中国と日本の夢の絵には興味深い違いもある。たとえば夢の発生する場所。中国の絵の夢は、頭の先端から発生するが(図2)、同じ絵を描いても日本では、夢の出処は後頭部に流れ、中国の構図を微妙に崩していく。日本の絵画では、夢の発生場所は様々であり、後頭部、口や喉のあたり、あるいは胸のへんに散在するのである。

ハーバードの絵巻の改稿過程には、その意味で興味深い推移がある。最初のラフなスケッチでは、フキダシは口の近くから生まれ、2回目は胸のあたり—しかも描き直しがある—、そして3回目は、描線の先端を体から離して描き、発生箇所をぼかす。ニューヨークの絵巻に引き継がれるその補訂には朱の訂正もあり、画家の最終判断としてのこだわりが、垣間見える。なぜそのような書き換えていったのだろう。体から離れて吹き出されるモノとは、人が死に、魂が離脱していくことのアナロジではないか。頭の先端から放出される夢を多様に載せる元代の挿絵入中国小説『全相平話』も、皇帝の死を描く場面には(図3)、横たわる王から離れたフキダシ(魂)を描く。『平家』の場面は眠る重盛の死の予兆でもあった。単なる夢から構図を微妙に変化させ、定信は死のメタファーをも取り込んでいった—、この私案はいかが?



生体内分子を可視化する

ケミカルバイオロジーを先導する「分子プローブ」を開発

○工学研究科 教授

菊地和也 — Kazuya Kikuchi

研究室HP: <http://www-molpro.mls.eng.osaka-u.ac.jp/> E-mail: kkikuchi@mls.eng.osaka-u.ac.jp

試験管内ではなく、生きたままの細胞において分子の反応を可視化する、新たな解析手法が注目を集めている。それは「センサー分子」や「分子プローブ」「化学プローブ」と呼ばれるもので、生体内の特定分子の機能を解明するための化学ツールである。菊地研究室＝生命先端工学専攻物質生命工学コースでは、それらの開発・作製にとどまらず、実際に応用して生理機能やタンパク質機能などを解析し、化学を用いた生物学研究(ケミカルバイオロジー)で成果をあげている。

可視化による分子機能の解明

化学と生物学の境界領域の研究を志していた菊地和也教授は、東京大学大学院薬学系研究科博士課程を修了した1994年、蛍光センサー分野の最先端を学ぶために留学した。緑色蛍光タンパク質に関する研究で下村脩博士とともに昨年度のノーベル化学賞を受賞したロジャー・Y・チェン教授の研究室(カリフォルニア大学サンディエゴ校)で、ケミカルバイオロジーの研究に携わった。

細胞内分子と特異的に反応して可視化することができる「分子プローブ(センサー分子)」は、生物学現象を光情報や磁気情報に置き換えることにより、化学プローブなしでは不可能だった生体の分子機能解明を可能にする。

ポストゲノム時代の最先端の研究が評価され、菊地教授は昨年11月に「日本BM科学賞」を、12月に英国王立科学協会(Royal Society of Chemistry)のEmerging Investigator Awardを受賞した。

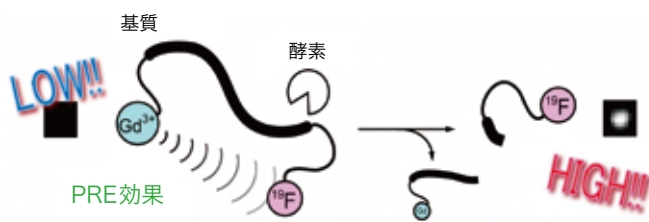


機能性MRIプローブ

ケミカルバイオロジーとは、化学を用いた生物学研究であり、化合物合成等による化学ツール(実験材料)の開発を突破口として生物学を切り開く分野だ。「生体内分子を可視化する化学プローブ」の一例として「機能性MRIプローブ」がある。

「生体深部での酵素反応をMRIコントラスト上昇に置き換え、白く浮かび上がる画像が得られます。これには遺伝子発現の指標である酵素と反応するスイッチと、MRIシグナルを上昇させるという二つのスイッチ機能があります。化学スイッチを分子にどのような形で組み込むかが、アイデアの勝負になります。アイデアが良くて、実際に生体の中で使えるようなスイッチを

遺伝子発現を可視化する機能性MRIプローブ



分子内PRE(Paramagnetic Resonance Effect)効果によってMRIシグナルを制御

フッ素とガドリニウムを近づけておき、その間を切断すると相互作用で磁性が変わり、フッ素のMRI画像が白く見えてくる

化学の力で行うことができれば、少人数のプロジェクトでもアメリカの研究を凌駕できると考えています。生体深部の遺伝子発現を、それが出てくることを可視化して示すことによって、他の手法では見ることができない分子の機能を、目に見える形にすることができるようです」

開発した化学ツールで実践

「重要な点は、分子プローブの構造式を机の上で考えるだけではなく、実験して本当に生物学研究に使えるかどうかです。私の研究室では、実際に生物学へ応用できるかどうかというハードルを課しています。最終的に、他の生物学研究の手法では見いだすことができない新たな生物原理に結びつくこと、すなわちケミストリー・インシエティッド・バイオロジカル・リサーチをケミカルバイオロジーと考えています」

自分で考えたことを実験して新しい研究材料をつくり、それを使って生命科学研究に取り組む。これは一朝一夕にはいかない。

「一ステップごとに確実に自信もてる実験を重ね、つくったものを大事にしてほしい。例えば、自分の作ったプローブを手で脳科学の研究室に弟子入りし、新しい技術を学んで実験すると、気合を入れて実験するのでモチベーションが高まります。『これは私の分子だ』という愛着もわいてきて、気持ちが入っているぶん、いい結果が得られると思います」



スウェーデン国王・王妃とクラフォード賞受賞者の記念写真
(前列左・平野俊夫医学系研究科長。左から2人目・岸本忠三元総長)

岸本忠三元総長、平野俊夫医学系研究科長 「クラフォード賞」を受賞

生命機能研究科の岸本忠三寄附講座教授(元大阪大学総長)と平野俊夫・大学院医学系研究科長・医学部長(生命機能研究科・医学系研究科・免疫フロンティア研究センター教授)が、日本人として初めてクラフォード賞を受賞しました。

受 賞

平成21年春の紫綬褒章受章 中嶋英雄教授(産業科学研究所)

平成21年度科学技術分野の文部科学大臣表彰

[科学技術賞(開発部門)] 武田直和特任教授(微生物病研究所)

[科学技術賞(研究部門)] 澤芳樹教授(医学系研究科)、菊谷仁教授(微生物病研究所・所長)、小溝裕一教授(接合科学研究所)、森田清三教授、杉本宜昭特任講師、阿部真之准教授(工学研究科)

[若手科学者賞] 小芦雅斗准教授、佐藤和則特任准教授(基礎工学研究科)

・安井武史助教(基礎工学研究科)

「平成21年度応用物理学会・光学論文賞」受賞

“インターロイキンの発見、それらの特性決定と炎症性疾患における役割の探求”という基礎的研究が関節リウマチなどの炎症性疾患に対する画期的な治療薬開発への道を開いた事が評価されての受賞で、米国コロラド大学、デナレロ教授との共同受賞です。

クラフォード賞は、人工腎臓を発明したホルガー・クラフォードとその妻によって創設されたクラフォード財団がスポンサーとなり、ノーベル賞選考機関のスウェーデン王立科学アカデミーが1982年より毎年、世界的に優れた業績を1件ずつ表彰している賞です。天文学・数学、地球科学、生物学の3分野から毎年1分野ずつ順番に選ばれますが、関節炎分野のみは、画期的な研究成果があった年のみ表彰されることになっており、2009年度は関節炎分野からの選出になりました。

授賞式を含めた一連の行事はクラフォードディとして、5月11日から13日までの3日間、スウェーデンのストックホルムとクラフォード財団発祥の地ルンドで開催されました。王立科学アカデミーでの授賞式、各受賞者の記念講演、国王・王妃ご臨席の晩餐会等が開催されたほか、多くの催しが開催され、スウェーデン国王、王妃ご臨席のもと開催された授賞式では、カール16世グスタフ国王から直々に受賞者にメダルと賞状が手渡されました。

・安井武史助教、橋本守准教授、荒木勉教授(基礎工学研究科)

「平成21年度日本機械学会賞・船井賞」受賞

・野島博教授(微生物病研究所)

「第9回バイオビジネスコンペJAPAN(2009)奨励賞」受賞

・滝澤忍准教授(産業科学研究所)「平成21年度日本薬学会奨励賞」受賞

・小川一夫教授(社会経済研究所)

「中小企業研究奨励賞(平成20年度)」受賞

・野首孝祠特任教授(先端科学イノベーションセンター)

「平成20年度日本歯科医学会会長賞(研究部門)」受賞

・宮井潔名誉教授(医学系研究科)

「2009年度日本内分泌学会マイスター賞」受賞

Schedule——◇シンポジウム等

●日本遺伝子治療学会

7月9日(木)～11日(土)、コンベンションセンター。

問い合わせ先=医学系研究科・玉井克人准教授

E-mail: tamai@gts.med.osaka-u.ac.jp

●RISS国際シンポジウム"Sustainability Transition - International Initiatives towards a Resource-circulating Society"

7月22日(水)～23日(木)、大阪大学中之島センター。

問い合わせ先=大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究機構事務局
(TEL06-6879-4150)

●Challenging roles of Physiome, VPH and in silico Human in medicine (第36回国際生理学会世界大会IUPS2009)

7月28日(火)～8月1日(土)、京都国際会館。

問い合わせ先=IUPS2009シンポジウム担当事務局(TEL06-6879-3516)

●平成21年度大阪大学大学院言語文化研究科公開講座

8月10日(月)～13日(木)、大阪大学中之島センター。

問い合わせ先=言語文化研究科総務係(TEL06-6850-5855)

●第6回大阪大学社会経済研究所附属行動経済学研究センターシンポジウム

8月26日(水)、大阪大学中之島センター。

問い合わせ先=社会経済研究所庶務係(TEL06-6879-8552)

●第7回プラズマ応用科学国際シンポジウム

8月31日(月)～9月4日(金)、ドイツ・ハンブルク大学。

問い合わせ先=接合科学研究所・小林明准教授(TEL/FAX06-6879-8694)

●The Third International Conference on the Characterization and Control of Interfaces for High Quality Advanced Materials, and Joining Technology for New Metallic Glasses and Inorganic Materials (ICCCI 2009)

9月6日(日)～9日(水)、ホテル日航倉敷(岡山)。

問い合わせ先=接合科学研究所・桐原聡秀准教授
(TEL/FAX06-6879-4370)

●第4回国際WT1会議

9月10日(木)～11日(金)、千里ライフサイエンスセンター。

問い合わせ先=第4回国際WT1会議事務局(TEL06-6879-3677)

●日本数学会・市民講演会

9月23日(水・祝)、理学部D501大講義室。

問い合わせ先=理学研究科・梅原雅顕教授

E-mail: umehara@math.sci.osaka-u.ac.jp

●コンビナトリアルケミストリーとケミカルバイオロジー

：創業の新しいパラダイムに向けて

9月24日(木)～25日(金)、千里ライフサイエンスセンター。

問い合わせ先=理学研究科・深瀬浩一教授

E-mail: contactus@jccf.info

●World wide Views in JAPAN～日本からのメッセージ

：地球温暖化を考える～

9月26日(土)、京都市勤業館みやこめっせ。

問い合わせ先= <http://www-japan.net/contact/>



OSAKA UNIVERSITY

NEWS

TOPICS

緑のデザイン賞「緑化大賞」を受賞 豊中キャンパス東口環境整備 ▶▶▶▶

豊中キャンパス東口環境整備計画が第19回「緑化大賞」を受賞しました。この賞は、財団法人都市緑化基金と第一生命保険相互会社の共催により、緑豊かな都市環境の形成を図るとともに、その中で育まれる人と自然とのふれあいやコミュニティの醸成などに役立つことを目的にしています。全国から新たに提案される緑化プランを公募し、優れたプランを表彰するとともに緑化実現のための資金助成を行うものです。

豊中キャンパス東口環境整備はキャンパスマスタープランの発展形として豊中キャンパス東口のバリアフリー化、傾斜地の公園化などを目的に、キャンパスデザイン室・施設部により計画が進められ、道路と

の高低差約6mのスロープ化、および豊中市側斜面の公園の整備を実施しました。

緑化の考え方として、今あるサクラとモミジの景観を活かしながら、「ヤブラン」をはじめとする気候風土に合った宿根草・地被類を列状に植えることで、「新しい里山の景」として表現することを狙ったもので、大学関係者・地域住民に安全に楽しく散策できる森を創出するとともに、まちの美しい緑景観を形成する点が高く評価されたことが、本受賞に結びつきました。

表彰式は年5月25日(月)、帝国ホテルで行われ、賞状と副賞(緑化助成金)が授与されました。

今後は維持管理において大学・近隣住民



緑化された豊中キャンパス東口

団体との連携強化の中で、コミュニティガーデンとし醸成を図っていくことが大切となります。

また、6月6日(土)に豊中市立第二中学校吹奏楽部による演奏、浅利敬一郎豊中市長、西田正吾理事・副学長、大学関係者、地域の方々、豊中みどり幼稚園の園児らの参加により「阪大東口完成式」を実施し、通り初めを行います。

第4回ホームカミングデイ 最多の300人が参加



▲最多の300人が参加した懇親会のようす

▼挨拶をする熊谷同窓会連合会会長(左)と鷲田総長



本年も「いちよう祭」の開催に合わせ、5月2日(土)豊中キャンパス共通教育本館(イ号館)イ講堂で第4回大阪大学ホームカミングデイが開催されました。卒業生の方々、教職員OB、名誉教授の方々に加え、特別招待として昭和56年3月卒業生をお招きし、これまでで最多の約300人にご参加いただきました。

イ講堂では、武田佐知子理事・副学長の司会により、大阪大学混声合唱団による「大阪大学学生歌」「万葉歌碑のうた」の合唱の後、鷲田清一総長の主催者挨拶、熊谷信昭同窓会連合会会長(元総長)の挨拶の後、本年1月～3月にNHK土曜時代劇で

放送された「浪花の華 一緒方洪庵事件帳」の原作者で、本学卒業生の築山桂さんから「母校の思い出」と題したお話をいただきました。

レセプションは、4月に耐震補強も完了しリニューアルした「図書館下食堂」に場所を移して、武田佐知子理事・副学長の司会により経済学部卒業生の山本信孝氏(元UFJ総合研究所会長)による乾杯のご発声でスタートしました。

会場では、学生軽音楽サークル「SWING」の軽快な音楽をBGMに、参加された方々の思い出話や、総長との記念撮影など終始なごやかな雰囲気の中、協賛いただいた企業等から提供のあった景品の抽選会も催され、来年の再会を互いに誓い合いながら散会となりました。



講演する小説家の築山桂さんに場所を移して、武田佐知子理事・副学長の司会により経済学部卒業生の山本信孝氏(元UFJ総合研究所会長)による乾杯のご発声でスタートしました。

会場では、学生軽音楽サークル「SWING」の軽快な音楽をBGMに、参加された方々の思い出話や、総長との記念撮影など終始なごやかな雰囲気の中、協賛いただいた企業等から提供のあった景品の抽選会も催され、来年の再会を互いに誓い合いながら散会となりました。

いちよう祭にぎわう

5月1日(金)2日(土)に、本学の創立記念日を祝し、全学を挙げて新入生を歓迎するとともに教職員、学生の親睦を図ることを目的とした「いちよう祭」が開催されました。

新入生、保護者のほか、大阪府内の各高等学校など学外の方々へ広く参加を呼びかけ、各局開催の施設開放・展示会・講演会等に多数の参加者が訪れました。



いちよう祭のステージ

今年も出航します「天神祭」船渡御



日本三大祭の一つ「天神祭」の船渡御に今年も「阪大船」が参加します。

船渡御は、天神祭のクライマックスを彩り、大川を100隻あまりの船が行き交う、大阪の夏の風物詩として有名です。また大阪大学の出船も今年で5回目となり、夏のイベントとして定着してきました。今年も装いも新たに、その勇姿を大川の川面に浮かべます。

NEXT ISSUE・No.45

◎大阪大学と地域の関わりについて考えます。

[阪大ニュースレター]次号(45号)の特集予告

●大阪大学または阪大ニュースレターへのご意見、お問い合わせがありましたら、Eメールで受け付けております。E-Mail:NEWSLETTER@star.jim.osaka-u.ac.jp

◎阪大ニュースレターは、新聞古紙の再生紙を使用しています。